

大洲城(地蔵ヶ嶽城, 比志城, 大津城) (国重要, 県史跡, 百名城) (大洲市大洲)

大洲城（おおずじょう）は伊予国喜多郡大洲（四国・愛媛県大洲市大洲）にあった城である。別名としては地蔵ヶ嶽城、比志城、大津城（大洲の旧称）などがある。

大洲の地は、伊予を南北につなぐ大洲街道・宇和島街道の結節点にあり、また東には四国山脈を抜けて土佐国に出る街道がある。また、すぐ西には大洲の外港とも言える八幡浜（現八幡浜市）があり、大洲は歴史的にはややひなびた立地ながらも交通の要衝といえる場所にあった。宇都宮氏が創建した当初は、肱川と久米川の合流点にあたる地蔵ヶ岳に築城したことから地蔵ヶ岳城と呼ばれた。

江戸時代初期、藤堂高虎らによって大規模に修築がなされ、近世城郭としての体裁を整えた。伊予大洲藩の政治と経済の中心地として城下町は繁栄していた。また、明治維新後から現在にいたる地元住民の城郭への保護活動と、平成 16 年（2004 年）に主に市民による寄付によって完成した往時を出来る限り忠実に復元した 4 重 4 階の天守も特筆すべき点である。江戸時代から残る台所櫓・南隅櫓など 4 棟の櫓が国の重要文化財、城跡一帯が県指定史跡に指定されている。

この地に初めて築城したのは、鎌倉時代末期に守護として国入りした伊予宇都宮氏の宇都宮豊房で、元徳 3 年（1331 年）のことであるといわれている。

豊房には子がなく筑後宇都宮氏の宇都宮貞泰の子の宇都宮宗泰を養子に迎え、宇都宮氏はその後、国人として二百数十年間にわたって南伊予を中心に支配を行うが、永禄の末期に毛利氏の伊予出兵によって降伏した。天正初年に土佐の長宗我部元親と通じた家臣の大野直之によって大洲城を追われた。しかし天正 13 年（1585 年）にはその大野直之も豊臣秀吉の意を受けた小早川隆景によって攻め滅ぼされ、その小早川隆景が 35 万石で伊予に入封し、大洲城は一支城となった。

その後戸田勝隆が城主として入ったが、文禄 4 年（1595 年）に藤堂高虎が入城すると近世の城郭として整備され、慶長 14 年（1609 年）には淡路の洲本から脇坂安治が入城し、この 2 人の時代に天守^[2]をはじめとする建造物が造営された。

また脇坂安治の時代に従来の「大津」から現在の「大洲」に城名が変更（異説あり）された。元和 3 年（1617 年）に伯耆米子から 6 万石で加藤貞泰が入り、以後加藤氏が 12 代に渡り大洲藩主として治め明治維新を迎えた。

Wikipedia による



